# 熊本城調査研究センター年報 2

平成 27 年度

2016

熊本市熊本城調査研究センター

# 目次

Ⅰ. 組織……1
Ⅱ. 平成 27 年度の事業…… 2
1. 概要…… 2
2. 確認調査・工事立会・地質調査…… 4
3. 史料調査……21
4. 委員会運営……21
5. 啓発（刊行図書・論文・報道・講演等）……24
6. 寄贈図書・寄贈資料……26
Ⅲ. 研究ノート…… 31
熊本城出土の文字瓦 1 …… 31
寛永期の熊本城本丸御殿と「地震屋」…… 35

本書は、熊本市経済観光局文化スポーツ交流部熊本城調査研究センターが平成 27 年度に実施した業務の概要を記したものである。

# Ⅰ．組織（平成 27 年度）

1．観光文化交流局の組織

- 観光文化交流局
  - シティプロモーション課
  - 観光振興課
  - 熊本城総合事務所
  - 動植物園
  - 文化振興課
  - **熊本城調査研究センター**
    - 第一調査班
    - 第二調査班
  - スポーツ振興課
  - 市民会館

2．熊本城調査研究センターの構成

平成 27 年度

| | | |
|---|---|---|
| 所長 | | 渡辺勝彦（日本建築史） |
| 副所長 | | 河田日出男 |
| 文化財保護主幹 | | 鶴嶋俊彦（近世城郭） |
| 第一調査班 | 文化財保護主幹兼主査 | 美濃口雅朗（考古） |
| | 文化財保護主任主事 | 金田一精（考古） |
| | 文化財保護主任主事 | 國武真紀子（考古） |
| | 文化財保護主任主事 | 山下宗親（考古） |
| | 文化財保護主事 | 木下泰葉（文献） |
| | 嘱託職員 | 村田理恵（考古） |
| | 嘱託職員 | 竹田知美（考古） |
| 第二調査班 | 主査 | 古賀丈晴（建築） |
| | 主任主事 | 益田知子（事務） |
| | 主任技師 | 田代純一（建築） |
| | 嘱託職員 | 小多信幸（事務・文献）　計 14 名 |

3．熊本城調査研究センター施設概要

古京町別館内（熊本市中央区古京町 1-1）

執務室（65 ㎡）、作業室（55 ㎡）、会議室（43 ㎡）、資料室（18 ㎡）、三の丸作業室及び収蔵庫（263 ㎡）

## Ⅱ　平成 27 年度の事業

1. 概要

（1）熊本城調査研究事業

a. 本丸御殿発掘調査報告書作成

事業概要

平成 11 年から平成 18 年にかけて実施した本丸御殿跡発掘調査資料を整理し、報告書を刊行した。

成果

『熊本城跡発掘調査報告書 2 —本丸御殿の調査—』　刊行

b. 石垣修理報告書作成

事業概要

平成 15 年から平成 21 年にかけて城内各所の石垣修理工事に伴って実施した発掘調査資料を整理し、報告書を刊行した。

成果

『熊本城跡発掘調査報告書 3 —石垣修理工事と工事に伴う調査—』　刊行

c. 特別史跡熊本城跡総括報告書整備事業編作成

事業概要

特別史跡熊本城跡内で昭和以降に実施した石垣の保存修理・復元、文化財建造物の保存修理、建造物の復元整備について現存する資料と現地調査により総括する報告書を刊行した。

成果

『特別史跡熊本城跡総括報告書　整備事業編』　刊行

d. 重要文化財熊本城宇土櫓他 2 棟構造調査その他

事業概要

国指定重要文化財熊本城宇土櫓、平櫓、不開門は、前回の保存修理から 30 年程度経過しており、経年による劣化や破損が見られ、保存修理が必要な時期に来ている。また保存修理を実施するにあたっては耐震対策の検討が求められている。

そのため、耐震対策を含めた保存修理実施のために、耐震基礎診断を行なう上で必要な構造部材の評価のための調査、及び今後予定している保存修理を行なう上で必要な破損状況を把握するための調査を行なった。

e. 熊本城宇土櫓他 2 棟耐震基礎診断に伴う地質調査

事業概要

上の構造調査と共に、宇土櫓他 2 棟の耐震基礎診断に必要な地盤のデータを得るため、城内 6 箇所の地質調査を行なった。

f. 史跡内の現状変更に伴う確認調査・立会調査

平成 27 年度は 15 件の工事立会を行なった。現状変更に伴うものが 8 件、文化財保護法第 93・94 条に伴うものが 4 件、緊急対応・維持管理に伴うものが 3 件である。熊本城内で掘削工事が行われる場合は、文化振興課・熊本城総合事務所と協議して、少なくとも工事立会をしている。

（2）熊本城資料収集・デジタル化事業

事業概要

過去に熊本城跡内で行なわれた石垣保存修理、建造物の保存修理、復元、その他整備についての資料を収集し、整理する。また、熊本城調査研究の基礎資料として、情報発信のデータバンクとして活用を図るため、収集資料のデジタル化を進めた。

（3）文献等資料調査

事業概要

熊本城・城下町に関する総合的な調査研究と報告書作成の基礎作業として、古文書・絵図・古写真等の史資料の所在を確認し、収集・目録化を進めた。平成 27 年度は、大阪城天守閣、熊本県立図書館、熊本市立図書館、熊本大学附属図書館寄託永青文庫、熊本博物館、宮内庁三の丸尚蔵館、国立国会図書館、国立公文書館、後藤是山記念館、しろはく古地図と城の博物館富原文庫、長崎大学附属図書館、長崎歴史文化博物館、山口県文書館の史資料を調査した。

（4）委員会等運営

事業概要

特別史跡熊本城跡の保存と活用について総合的に検討するため、特別史跡熊本城跡保存活用委員会を開いている。

平成27年度は、親委員会である保存活用委員会を2回、専門部会である計画策定部会を3回、史跡・建築部会を3回、活用部会を2回、絵図・文献部会を2回開催した。

（5）啓発事業

a. ホームページ公開

事業概要

熊本城調査研究センターの事業成果等を情報発信するために、熊本市のホームページを活用し、当センターの概要、委員会の議事等、刊行物、講演会・研修会報告等を公開している。

更新履歴

6月12日　保存活用委員会議事録（要旨）を更新、講演会・研修会等を更新、研究センターニュースを更新

6月26日　刊行物を更新

7月10日　講演会・研修会等を更新

8月21日　講演会・研修会等を更新

10月6日　講演会・研修会等を更新、研究センターニュースを更新

11月5日　講演会・研修会等を更新、研究センターニュースを更新

b. 講演会、定期講座等

事業概要

熊本城への理解をより深めるため、各種講演会や定期講座などに出演し、熊本城や城下町等について講演を行なった。平成27年度は後掲の一覧の通り。

2．確認調査・工事立会・地質調査

（1）熊本博物館リニューアル工事に伴う確認調査

原因：熊本市立熊本博物館リニューアル工事（現状変更）

期日：平成 27 年 5 月 11 日 ~ 平成 27 年 6 月 18 日

面積：3658. 86 ㎡（建築面積）

方法：平成 25 年度に実施した確認調査の継続調査であり、建物内北東側（旧理工展示室）の増床工事予定箇所を対象とした。なお、本年度調査に先立って関係機関による協議を行なった結果、平成 25 年度調査の成果をもとに、明治時代初期（西南戦争頃）以前の土層・遺構について現状保存を図るという観点から、工事による掘削深度を現況床面下− 110cmと設定した。すなわち、本年度調査は現況床面下− 110cmまでを掘り下げ、これより浅いレベルについて記録保存を図ったものである。

成果：主要遺構は、近現代の建物跡 4 棟、配水管跡 1 条である。建物跡はいずれも布基礎で、溝内に礫を充填したものである。うち 3 棟については、礫とともにコンクリート塊・レンガ片も認められた。配水管跡は溝状の掘形内に瓦質の土管を埋設したものである。以上、本年度の調査は、昭和 50 年の博物館建設工事時の堆積土・明治時代末頃の造成土と、後者（明治時代末頃の造成土）を掘り込む近現代の遺構を扱うものであった。なお、本件の報告書は平成 28 年度刊行予定である。

**（1）調査区北側掘削状況**

**（1）建物布基礎跡**

**（1）配水管跡**

（2）合同庁舎跡解体着手前の確認調査

原因：合同庁舎解体工事に伴う埋蔵文化財の確認調査（文化財保護法第 94 条）

期日：平成 27 年 7 月 21 日 ~ 平成 28 年 2 月 29 日

面積：127. 93 ㎡

方法：江戸時代の絵図や近代作成の地図等を参考に、遺構が想定される箇所にトレンチを設定して検出・確認に努めた。基本的に必要最小限度で調査を実施し、遺構が検出された段階で掘り下げは部分確認までとした。

成果：

土層堆積　今回申請地内に 15 箇所のトレンチを設定して、埋蔵文化財の確認を実施した。基本的な土層堆積状況は以下の通りである。

Ⅰ層　表土層：現在の地表面。アスファルト + 砕石で構成。

Ⅱ層　整地土層：現代の整地土層。煉瓦片やコンクリート片などを含む。まれに安山岩割石層が確認される箇所もある。

Ⅲ層　整地土層：火砕流堆積物（褐灰）を中心とした近代の二次堆積土層。

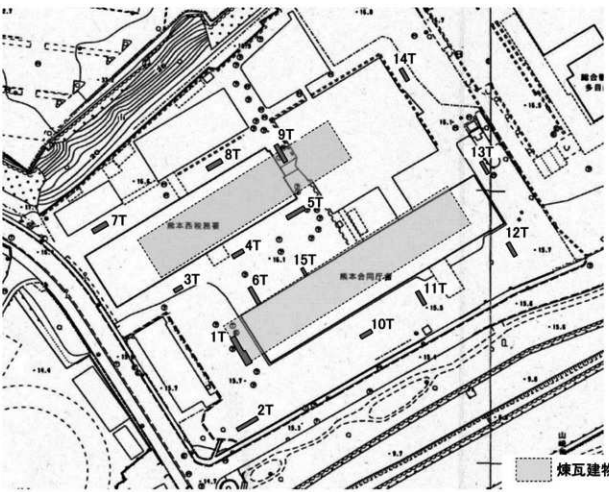
Ⅳ層　整地土層：火砕流堆積物（赤褐色・褐色）を中心とした二次堆積土層。

Ⅴ層　整地土層：凝灰岩を中心とした二次堆積土層。

検出遺構と出土遺物　遺物は、Ⅲ層からは江戸時代後期 ~ 明治時代初期の遺物が混在する。Ⅳ層からは主に江戸時代の遺物が出土しているが、一部中世の瓦器椀片も出土している。

遺構については、1・9・15 トレンチにおいて近代煉瓦建物の一部を確認している。7・8 トレンチにおいて間知石の溝を確認している。他、9 トレンチにて建物基礎、4・5 トレンチにおいて土坑を確認している。間知石溝・建物基礎・土坑については明確な出土遺物はなかったが、Ⅲ層を掘り込んで確認されたので、近代以降に属するものと想定される。なお、江戸時代に関連する遺構は確認されていない。

まとめ　以上の結果から、当該地においては、最浅部分で現地表面下約 40 cmから近代の遺構が存在する。確認された遺構の主要なものは、明治政府が熊本城を接収した後、明治 42 年頃に陸軍兵器庫として建設した建物基礎である。こうした遺構は、旧日本陸軍の拠点として利用された熊本城における近代史を語るうえで重要な資料であり、文化財と捉えて保存措置を講ずる必要がある。よって、当該地に現存する建物以外の空間には、良好な形で遺構が存在するものと判断される。なお、江戸時代の遺構については、近代以降の土地の改変や整備等により削平されたものと想定される。




（3）確認調査トレンチ位置図（1/1500）

（2）調査区 合同庁舎跡

（2）1 トレンチ煉瓦建物基礎

（2）1 トレンチ煉瓦建物基礎

（2）7 トレンチ 間知石溝

（2）8 トレンチ 間知石溝

（2）14 トレンチ
深掘り土層断面

（2）9 トレンチ煉瓦建物基礎

（2）15 トレンチ
煉瓦建物雨落ち溝

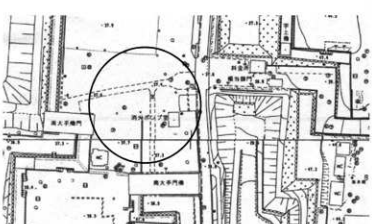
（3）西大手櫓門～頬当御門前園路改修工事立会

原因：園路の舗装改修（現状変更）

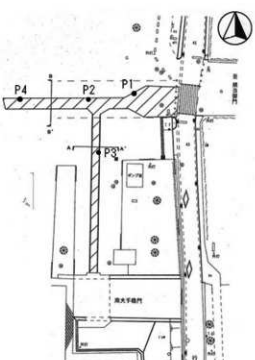
期日：平成 27 年 5 月 12・13 日

方法：掘削面積は約 300 ㎡で、既存の老朽化したアスファルトのみを除去・再舗装し、アスファルト下部の砕石については掘削しない工事である。このため工事立会をもって対応した。

成果：掘削深度は、大部分は現地表下 3～5cm（アスファルト厚）であったが、工事西側においてアスファルトと採石敷きの間にコンクリートが敷かれた部分があって、このコンクリートを破砕・除去したため、当該部分については約 15cmであった。いずれにせよ、本工事による掘削は現代の層中（表層）に収まるものであった。



（3）工事立会位置図（1/2000）




（3）工事立会位置図（1/1000）

（3）工事風景 圏路東西方向

（3）工事風景 圏路南北方向

（3）P1 土層断面

（3）P2 土層断面

（3）P3 土層断面

（3）P4 土層断面

（4）数寄屋丸復元檜空調設備その他改修工事立会

原因：エアコン冷媒配管の毀損に伴う配管付け替え工事（緊急工事）

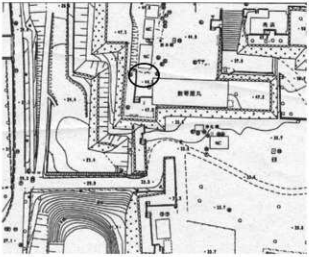
期日：平成 27 年 11 月 11・12 日

方法：既存の配管付け替え工事であることから、工事立会をもって対応した。

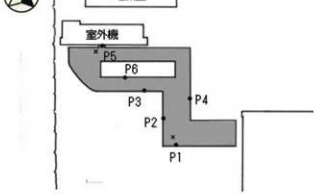
成果：掘削壁 6 箇所において土層柱状図を作成した。土層内容は下記の通りである。

1 層　表層に薄く砂利敷きが認められる。基質は褐色土（10YR4/4）を主体とし、部分的に暗褐色土（10YR3/4）を呈する。コンクリート塊・小礫を多く混入し、部分的に焼土粒・炭化物粒が認められる。

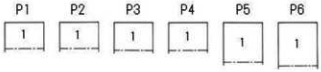
上記に加え、今回の掘削基底面において、その下部に埋設管（消火管・低電圧ケーブル）があることを表示するビニールが確認された（平面略図× 印）。以上、本工事による掘削は、現代の層中に収まるものであることを確認した。



（4）工事立会位置図（1/2000）




（4）工事立会位置図（1/200）




（4）土層断面柱状図（1/50）

（4）工事風景

（4）P1 土層断面

（4）P3 土層断面

（4）P5 土層断面

（4）P6 土層断面

（4）P1 付近の掘削基底

（5）第一高校体育館北側電柱改修工事立会

原因：台風により傾いた電柱の改修工事（文化財保護法第 94 条）

期日：平成 27 年 12 月 2 日

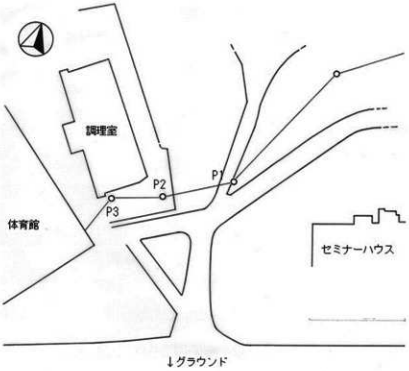
方法：周知の埋蔵文化財包蔵地内（熊本城跡遺跡群）に位置する県立高校敷地の工事であることから、調査主体は熊本県文化課である。電柱の建て替え工事であり、掘削面積も狭小であることから工事立会をもって対応し、本センターもこれに立ち会った。

成果：掘削箇所は 3 箇所である。電柱の設置は、既存電柱を引き抜いた穴をほぼそのまま使用するため、掘削は周辺を 75× 35cm~ 110× 60cmの範囲で、現地表下 40～50cmまで手掘りしするもので、その後、既存電柱を引き抜いた。土層内容は下記の通りである。

1 層　暗褐色土（10YR3/3～10YR3/2）・黒褐色土（10YR 2/3）：コンクリート塊・砂利を多量に混入する。現代の堆積土。

2 層　黒褐色土（10YR3/2）：風化凝灰岩粒を基質とする二次堆積土。同ブロックを混入。

掘削は 3 箇所とも 1 層のなかで収まっていた。ただし、1 地点においては既存電柱を引き抜いた部分の断面下位に 2 層が認められた。この 2 層の成因・堆積時期は不明である。以上、本工事は埋蔵文化財に影響

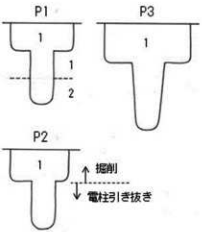



（5）工事立会位置図（1/1000）

を及ぼすものではないことを確認した。

（5）工事風景　電柱撤去

（5）P1 土層断面




（5）土層断面図（1/50）

（5）P2 土層断面

（5）P3 土層断面

（6）熊本博物館リニューアル工事立会

原因：熊本市立熊本博物館リニューアル工事（現状変更）

期日：平成 27 年 12 月 21 日～平成 28 年 3 月 8 日

方法：本年度、熊本博物館において確認調査を実施したが、以下①～③については工事立会をもって対応している。①平成 25 年度に実施したボーリング調査の成果等から、昭和 50 年の博物館建設工事時の堆積土が厚く、リニューアル工事による掘削がその中に収まると判断された箇所の工事。②確認調査において扱えなかった地中梁の撤去工事（確認調査段階では地中梁を撤去できなかった）。③屋外展示物の基礎撤去工事。以上について、工程に合わせ、随時立会を実施した。

成果：今回調査の目的は、明治時代初期（西南戦争頃）以前の土層・遺構について現状保存を図ることにある。立会の結果、いずれの箇所においてもこれに影響がないことを確認した。なお、本件の報告書は平成 28 年度刊行予定である。

（6）工事風景　地中梁撤去

（6）工事風景　地中梁撤去

（6）地中梁部分土層断面

（7）不開門料金所建替え工事立会

原因：不開門料金所の老朽化による建替え工事（現状変更）

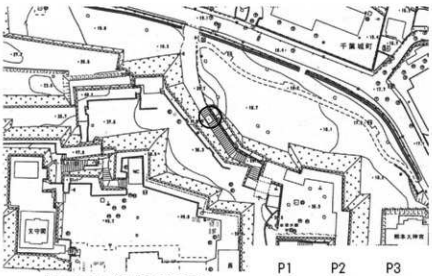
期日：平成 28 年 1 月 6 日

方法：今回工事は、既存の料金所建物と同位置・同規模で、基礎深度も同じであることから工事立会をもって対応した。掘削面積は約 15 ㎡である。

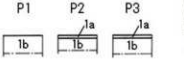
成果：掘削深度は現地表下約 20cmであり、現代の土層に収まることを確認した。

1ａ層　現代の舗装面。

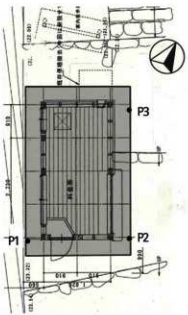
1ｂ層　暗褐色土（10YR3/4～10YR3/3）：粘性強い。山砂・砕石混入。現代の堆積土。




（7）工事立会位置図（1/2000）




（5）土層断面柱状図（1/50）




（7）工事立会位置図（1/100）

（7）P1 土層断面

（7）P2 土層断面

（7）P3 土層断面

（8）二の丸広場樹木抜根工事立会

原因：台風により傾いた３本の樹木の抜根（現状変更）

期日：平成 28 年１月 18・19 日

方法：今回工事は樹木の抜根であり、工事立会をもって対応した。掘削面積は、１地点は東西 3.8× 南北 2.5m、２地点は東西 2.4× 南北 2.1m、３地点は東西 2.8× 南北 3.0mであった。

成果：土層内容は下記の通りである。

１地点　１層　山砂層（現代の整地層）。

２層　暗褐色土（7.5YR3/3）：山砂を多量に混入。現代の土層。

３層　黒褐色土（10YR2/3）：灰色味の強い色調。山砂ブロック混入。現代の土層。

２地点　１層　黒褐色土とローム土・火砕流堆積土が互層状に堆積。山砂混入。現代の表土層。

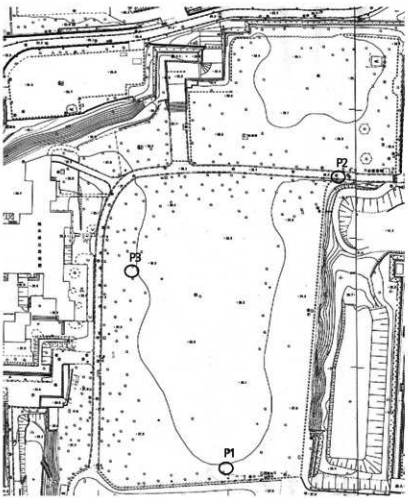
２層　黒褐色土（10YR3/2）・暗褐色土（10YR3/3）：砂利・コンクリート塊混入。近現代の土層。

3地点　1層　山砂を基質とする。現代の整地層。

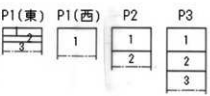
2 層　暗褐色土（10YR3/4）：締りやや強い。火砕流堆積土ブロック・黒褐色土ブロック・砂利を多量、炭化物粒少量混入。本層において江戸時代の陶磁器片出土。

3 層　にぶい赤褐色土（5YR5/4～5YR6/4）：火砕流堆積土。粘性強い。

掘削は、1・2 地点においては現代の土層に収まることを確認した。3 地点においては、現地表面下 30 cmから、時期不明ではあるが土質から江戸時代に遡る可能性が指摘できる 2 層を、その下部に本丘陵地の基盤である火砕流堆積土を掘削している。遺構は確認されなかった。遺物は、3 地点 2 層中より磁器片 2 点を採集している。1 は、景徳鎮窯系青花鉢である。内面に鶴に乗った福禄寿、外面に寿字・如意頭文が認められる。16 世紀末～17 世紀初頭に位置付けられる。2 は、肥前産染付皿である。内底に染付文、内側面に型打ち陽刻文（蓮華文）が認められる。17 世紀中頃（1640～50 年代）に位置付けられる。




(8)工事立会位置図（1/3000）




(8)土層断面柱状図（1/50）

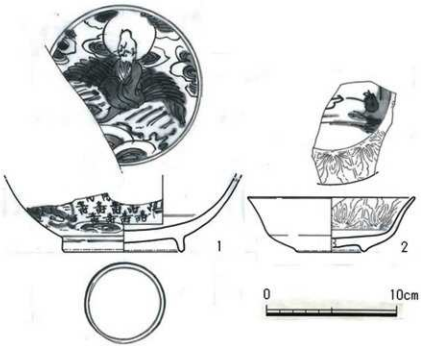
(8)掘削作業風景

(8)P1 東側土層断面

(8)P1 西側土層断面

(8)P2 土層断面

(8)P3 土層断面




(8)工事立会出土陶磁器実測図(1/3)

(9)行幸坂高圧引込開閉器盤取替え工事立会

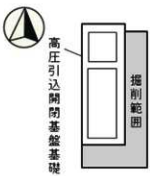
原因:高圧引込開閉器盤取替え及び基礎増設工事(現状変更)

期日:平成 28 年 1 月 27 日

面積:約 1.27 ㎡

方法:行幸坂東側、頬当御門から南約 40mの地点にある器盤取替え工事である。掘削面積が約 1.27 ㎡と狭小であり、掘削予定深度は約 75 cmあった。周辺環境の変遷や状況から、文化財への影響は少ないと想定されたので、工事立会をもって対応した。

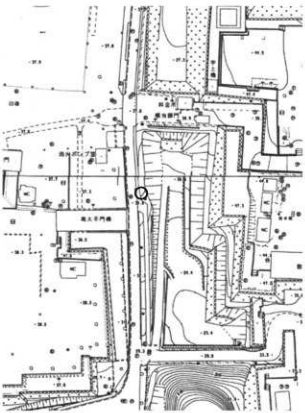
成果:南大手櫓門から南に伸びる坂が、明治 35 年(1902)「南坂」から「行幸坂」へと名称を変更すると同時に、急坂の平準化と直線化の基道路整備等により大きく削平、改変されているものと想定された。




(9)工事立会位置図(1/80)

(9)土層断面柱状図

(1/50)



(9)工事立会位置図(1/2000)

掘削は、現地表面から下約 75 ㎝の掘削作業であった。土層観察の所見は以下の通りである。

1 層　表土層：厚さ 24 ㎝。

2 層　にぶい黄褐色（10YR4/3）：山砂を多く含む。現器盤基礎埋土。厚さ 40 ㎝。

確認された土層は、全て現代に堆積した土層であった。遺構・遺物とも確認されていない。したがって、文化財への影響は無いものと判断した。

（9）工事風景

（9）掘削深度

（9）土層断面

（10）三の丸公園藤棚撤去工事立会

原因：藤棚の老朽化による撤去工事（現状変更）

期日：平成 28 年 2 月 16 日

方法：今回工事は、既存便益施設の撤去工事であることから工事立会をもって対応した。掘削面積は約 144 ㎡である。

成果：工事内容は、藤棚の床については、コンクリートを破砕・除去するのみで、その下部の砕石敷きは掘削しない、8 本のコンクリート柱については、基礎を撤去するのみで、基礎下部の砕石以下は掘削しないというものであった。掘削深度は、床については現地表下約 15cm（周縁の縁石部分のみは現地表下約 25～30 ㎝）、コンクリート柱については床除去後の砕石敷き面下約 80～90 ㎝であった。結果、今回の掘削は、全て藤棚建設工事の際の土層に収まることを確認した。なお、コンクリート柱の基礎撤去時の土層図は 8 箇所中、4 箇所を図掲している。

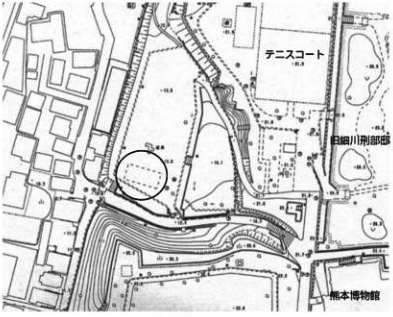
1a 層　暗褐色土（10YR3/3）：灰色味を帯びた色調。山砂ブロック混入。

1b 層　砕石層（藤棚床のコンクリート下部の砕石敷き）

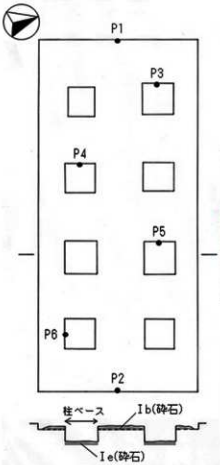
1c 層　暗褐色土（10YR3/3・10YR4/3）：現代の堆積土。山砂混入。コンクリート柱基礎を撤去した 8 箇所の観察地点のうち、3 箇所においてプラスチック・ビニール片の混入が認められた。東側の地点においては酸化鉄斑が顕著であった。

1d 層　コンクリート敷き。

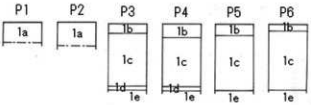
1e 層　砕石層（コンクリート柱基礎下部の砕石敷き）。




（10）工事立会位置図（1/2000）




(10)工事立会位置図(1/200)




(10)土層断面柱状図(1/50)

(10)工事風景

(10)P1土層断面

(10)P3土層断面

(10)P6土層断面

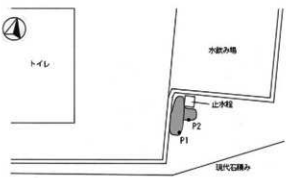
(11)三の丸第1駐車場漏水改修工事立会

原因:水道管の漏水に伴う配管付け替え工事(緊急工事)

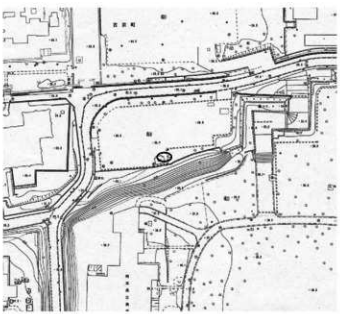
期日:平成28年2月18日

方法:既存の配管付け替え工事であることから、工事立会をもって対応した。

成果:掘削は現地表下80cmまで行ない、現地表下75cmにおいて漏水管を検出した。掘削壁2箇所において土層柱状図を作成した。土層内容は下記の通りである。



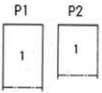

(11)工事立会位置図(1/150)



(11)工事立会位置図(1/3000)

1層　暗褐色土（10YR3/4）：山砂・ローム土ブロックを多量に、プラスチック・ビニール片を混入。部分的に砕石が集中する。

以上、本工事による掘削は、現代の層中に収まるものであることを確認した。




**（11）土層断面柱状図（1/50）**

**（11）掘削全景**

**（11）P1 土層断面**

（12）頬当御門前陥没改修工事立会

原因：頬当御門前の陥没の原因解明と改修のための工事（緊急工事）

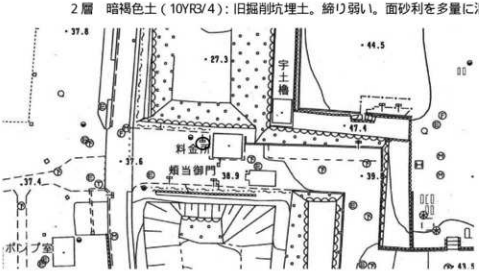
期日：平成 28 年 2 月 29 日

方法：頬当御門前に狭小な範囲の陥没が生じた。原因が漏水と予想されたこと、対処工事の掘削範囲が狭小であることから、工事立会をもって対応した。

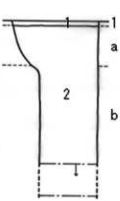
成果：掘削は手掘りにて行なった。結果、陥没箇所下部において径 60cmのほぼ垂直に落ちる旧掘削坑を検出し、その壁を傷めないよう留意して掘り下げた。旧掘削坑は、性格不明であるが、壁面にスコップ様の工具痕が認められること、埋土に面砂利が多量に混入することから、現代の掘削・埋没と考えられる。現地表下約 150cmまで掘り下げ、掘削基底にピンポールを刺して、さらに約 30cm以上続くことを確認したが、それ以上は掘れず、基底を検出するには至らなかった。埋土の締りが弱いことから、これが陥没の原因と予想できるが、性格を把握するには至らなかった。少なくとも、当初予想された埋設管の掘形ではないことは確実である。埋め戻しは、填圧しながら山砂にて行なった。遺構は検出されなかった。以上、本工事は、陥没の原因となった現代の旧掘削坑を検出し、掘り返したものであった。遺物は、旧掘削坑の壁面（ａ層）より引き抜いた江戸時代の瓦片を得た。うち、平瓦片の凹面に押された桔梗紋刻印（加藤家家紋を表したもの）を図掲している。

旧掘削坑　1層　砂利層（現地表層）

2層　暗褐色土（10YR3/4）：旧掘削坑埋土。締り弱い。面砂利を多量に混入。




**（12）工事立会位置図（1/1000）**




**（12）土層断面柱状図（1/50）**

旧掘削坑壁面　a層　にぶい赤褐色土(2.5YR5/4):火砕流堆積土主体。粘性強い。暗褐色土ブロック(7.5YR3/4)多量混入。江戸時代の瓦片を含む(江戸時代以降の堆積土)。

b層　にぶい赤褐色土(2.5YR5/4):火砕流堆積土(基盤層)。

(12)掘削風景

(12)旧掘削坑

(12)出土瓦刻印
(1/2)

(13)ガス導管撤去工事

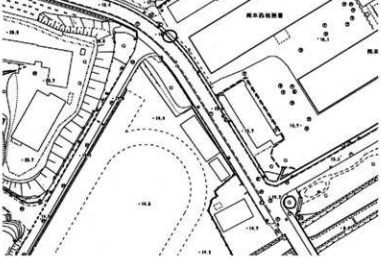
原因:旧合同庁舎内ガス管撤去に伴う工事(文化財保護法第93条)

期日:平成28年3月2日

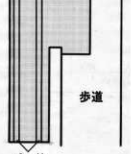
面積:6.6㎡

方法:旧合同庁舎内に敷設されたガス管撤去着手に先立って、道路本管から分岐している枝管基部の切断を行なう工事である。掘削面積は約6.6㎡である。工事着手部分は現車道部分で、夜間工事となることから原則工事立会とした。

成果:掘削箇所は旧合同庁舎北西部分、県立第一高等学校東側通用門正面部分である。工事は、現地表面下約1.4mの掘削が行なわれた。土層観察の結果、現在敷設されている2つのガス管とその下の電気配線敷設のため、アスファルト・砕石層(厚さ約30㎝)の下は全て山砂の客土層(厚さ110㎝)が確認された。したがって、文化財への影響は無いものと判断した。



(13)工事立会位置図(1/2000)




(13)工事立会位置図
(1/100)

(13)土層柱状図
(1/50)

（13）掘削風景

（13）掘削風景

（13）土層断面

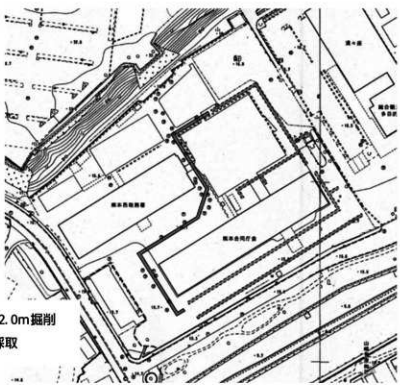
（14）合同庁舎跡ボーリング調査に伴う立会

原因：合同庁舎跡敷地内土壌汚染調査に伴うボーリング調査（文化財保護法第 94 条）

期間：平成 27 年 6 月 23・25 日

方法：庁舎内敷地の土壌汚染調査を行うため、11 箇所にボーリング調査と、28 箇所の表層採取を実施している。

成果：ボーリングの最大深度は約 2m まで掘削している。しかし、掘削面積は一箇所当たり直径 10 ㎝と非常に小さい面積である。工事着手による埋蔵文化財への影響は、極めて限定的かつ低いものと判断される。



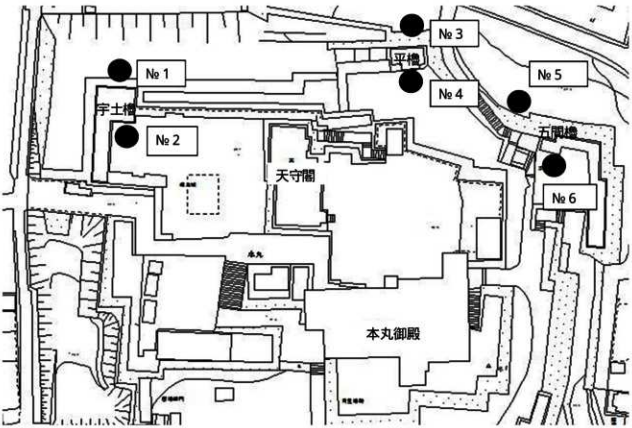
実線網部：0.5～2.0m掘削

破線網部：表層採取

（14）作業風景

（14）作業風景

（14）ボーリングコア




ボーリング調査位置図（1/10000）

（15）ボーリング調査

原因：「熊本城宇土櫓他 2 棟耐震基礎診断に伴う地質調査」（現状変更）

期日：平成 28 年 2 月 8 日～同年 3 月 1 日

成果：調査は委託業務として、ボーリング調査・標準貫入試験・PS 検層・室内土質試験を行なっているが、ここでは地質的な成果を中心に述べるため、以下に熊本城跡が立地する京町台地の地質について概観しておく。京町台地を覆っているのは阿蘇や雲仙を起源とする火山灰土で、植物の腐食等により黒土化した黒ボクと呼ばれる土である。その下位にはローム土と呼ばれる褐色粘質土が堆積しており、ローム土以下は火砕流である。火砕流は阿蘇 4（以下 Aso- 4）と呼ばれるものが主体で、熊本平野の丘陵部の基盤をなしている。最上位は粘性の強い砂礫層で、その下位が非溶結凝灰岩とされる砂礫を中心とした層、最下位は溶結した凝灰岩層となる。

調査地点は、宇土櫓・平櫓・五間櫓の各櫓台上と櫓台下の計 6 箇所。以下に各調査地点の概要を述べる。

№1：宇土櫓下

現地表面の標高は 25. 96m。現表土下 50cmまでは黒褐色の現代の土で、その下に約 1 mの厚さの砂礫層を確認した。これは Aso- 4 の再堆積土である。この砂礫層の下位から漆喰や瓦片を含む粘質土を確認した。この粘質土以下には粘性の強い砂質土が堆積していた。20～30 cm程度で分層できる。混入物が少ないことから石垣構築時に関連した土の可能性を想定している。この下位に 10cm程度のしまりの強い粘質土を経て Aso- 4 の砂礫層となる。なお、宇土櫓北側堀の加藤神社側の面には Aso- 4 が露出している。

№2：宇土櫓上

調査地点は宇土櫓の南側である。現地表面の標高は 44. 43m。現地表下約 120cmまでは平成 2 年の宇土櫓修理に伴う発掘調査後の埋め戻し土であり、その下位から厚さ約 3. 5mの盛土を確認した。盛土は 10～20cm程度の厚さで分層でき、版築状であった。盛土以下は自然堆積土であったが、旧地表面は確認できず、盛土の前に旧地表面を削平する造成が行なわれたようである。自然堆積土は、褐色粘質土のローム土層以下で、ローム土層から火砕流へ漸移的に変化していく。現地表下 4. 5～7mで確認できた Aso- 4は粘性の強い砂礫層以下であった。

現地表下 7m以下は Aso- 4の砂礫層で、現地表下約 31mで砂礫層から凝灰岩へ変化しており、凝灰岩下から安山岩を確認した。

現地表下 1. 2mまでは現在の表土（平成 2年修理時の発掘調査後の客土）

現地表下 1～4. 5m　盛土　黒褐色土を主体とし、10～20 cm毎に土質が変わる。城造成時の盛土層。

現地表下 4. 5～7m　ローム土・火砕流上位　褐色粘質土　これ以下が自然堆積土

現地表下 7～31m　火砕流　砂質感強い

現地表下 31～48. 7m　風化溶結凝灰岩

現地表下 48. 7m以下　安山岩

№3：平櫓下

現地表面の標高は 19. 33m。地表下 20cmまでは現在の表土で、それ以下は Aso- 4の火砕流。現地表下約 2mと約 5. 5mに水分を多く含む層を確認している。

№4：平櫓上

調査地点は平櫓の南側で、現地表面の標高は 36. 53m。地表下約 8mまで掘削した。現地表面から 40 cm程度は粘性土が堆積し、その下に砂利を多く含む土が堆積していた。粘性土を含めて近代以降の客土である。その下位に 15 cmの厚さの粘性土を確認した。この粘性土の上面には焼土と思われる明褐色の土が薄く乗っており、客土前の表土だった可能性がある。現地表面下約 1 m以下は Aso- 4の砂礫層であることを確認した。

№5：五間櫓下

標高は 18. 66m。土層が明瞭であったため掘削は 3 m程度である。厚さ 35 cmの現在の表土以下は、黒褐色・灰褐色の粘質土が堆積し、現地表下約 2m以下は Aso- 4の砂礫層であった。

№6：五間櫓上

標高は 36. 25m。地表下約 20mまで掘削した。厚さ 30cmの表土の下に、粘性の強い暗褐色土が約 1. 8mの厚さで堆積していた。この層には、瓦の破片が入っている。城造成の際の盛土と想定しているが、細分は難しい。現地表下約 2. 1m以下で Aso- 4の砂礫層を確認した。

今回の調査地点では、黒ボク土は検出できず、№2 宇土櫓上地点以外はいずれも表土下は火砕流であった。過去の調査等では、平左衛門丸で貯水槽を設置した際に黒ボク土の一部が確認されているが、本丸御殿や飯田丸の調査では明瞭な黒ボク土は確認されていない。熊本城は、築城の際に丘陵の基盤となる火砕流まで造成した可能性が高いことがわかった。築城前の茶臼山の地形や築城過程を復元するにはまだ資料不足であり、今後もボーリング調査を続ける必要がある。

№2 の宇土櫓前で確認した約 3. 5mの厚さの人為層は、その下位がロームから火砕流であり、旧地形ではなく一旦削平して盛土していることは明らかである。現在見られる宇土櫓と続櫓の石垣は、重複関係から平左衛門丸北石垣よりも後出する。平左衛門丸北石垣にみられる帯曲輪と同様のものを埋めて宇土櫓と続櫓の石垣を構築した可能性がある。

№2 の宇土櫓前の現地表下 48. 7mで安山岩が検出された点については、対比資料としては、天守再建に先立つ昭和 34年のボーリング調査がある。この調査でも現地表下約 34mから安山岩層が検出されている。安山岩層が安定して存在するとすれば、金峰山に起因するものと考えられる。御坊山・独鈷山・花岡山・万日山・立田山と同様に金峰山から断層活動によって切り離されたもので、京町台丘陵の先端が「茶臼山」と呼ばれるほど山状に高いことの成因であった可能性がある。

（15）№1 宇土櫓下調査地点

（15）№2 宇土櫓下調査地点

（15）№3 宇土櫓下調査地点

（15）№4 宇土櫓下調査地点

（15）№5 宇土櫓下調査地点

（15）№6 宇土櫓下調査地点

3．史料調査

平成 26 年度に引き続き、熊本城・城下町に関する総合的な調査研究と報告書作成の基礎作業として、古文書・絵図・古写真等の史資料の所在を確認し、収集・目録化を進めた。また、各調査先において史資料の現物確認・撮影を実施した。

（1）主な調査先

| | |
|---|---|
| 平成 27 年 5 月 20 日 | 熊本市立熊本博物館（熊本市） |
| 9 月 8・9 日 | 山口県文書館（山口県山口市） |
| 9 月 30 日 | しろはく古地図と城の博物館富原文庫（群馬県安中市） |
| 10 月 1 日 | 国立国会図書館、国立公文書館、宮内庁三の丸尚蔵館（東京都） |
| 10 月 5 日 | 熊本大学附属図書館寄託永青文庫（熊本市） |
| 10 月 30 日 | 後藤是山記念館、熊本市立図書館（熊本市） |
| 平成 28 年 1 月 13 日 | 熊本県立図書館（熊本市） |
| 3 月 4 日・5 日 | 長崎大学附属図書館、長崎歴史文化博物館（長崎市） |
| 3 月 9 日 | 大阪城天守閣（大阪市） |
| 3 月 29 日 | 熊本大学附属図書館寄託永青文庫（熊本市） |

＊熊本市歴史文書資料室で収集されている永青文庫細川家文書、熊本県立図書館所蔵文書等のマイクロフィルムを随時調査研究に利用している。

（2）主な成果

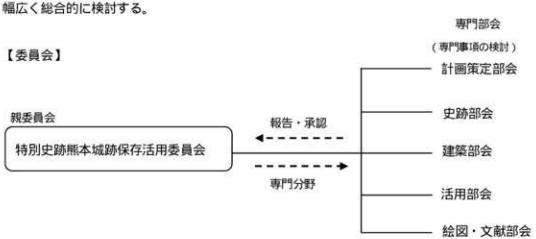
・平成 26 年 11 月に寄贈された「御城内御絵図」の修復を実施した。

・しろはく古地図と城の博物館富原文庫において、「御城内御絵図」（熊本市蔵）を昭和 36 年に透写した図が所蔵されていることを確認し、現物調査を実施した。当該図では、熊本市蔵原本で失われている本丸御殿部分の平面を確認することができた。

4．委員会運営

（1）委員会の目的

今後の熊本城の保存と活用のあり方について、文化財保護、魅力づくり及び地域の活性化などの観点から、幅広く総合的に検討する。




特別史跡熊本城跡保存活用委員会（H27 年度）組織図

特別史跡熊本城跡保存活用委員会委員名簿（平成 27 年度）

（50 音順、◎ 委員長、○ 委員長代理、㊥ 計画策定部会長、㊤ 史跡部会長、㊨ 建築部会長、㊧ 活用部会長、㊫ 絵図・文献部会長）

| 氏名 | 役職等 | 分野 | 専門部会 |
|---|---|---|---|
| 伊東　龍一 | 熊本大学大学院自然科学研究科教授 | 日本建築史 | 建築／絵図・文献 |
| 伊東　麗子 | 樹木医 | 植物 | 計画策定 |
| ㊥ 今村　克彦 | 熊本県文化財保護審議会委員 | 考古・史跡 | 計画策定／史跡 |
| 北野　博司 | 東北芸術工科大学　歴史遺産学科長 | 考古学 | 史跡 |
| 北原　昭男 | 熊本県立大学環境共生学部環境学科教授 | 木質構造 | 建築 |
| 千田　嘉博 | 奈良大学長 | 考古学 | 計画策定 |
| ㊤ 田中　哲雄 | 日本城郭研究センター名誉館長 | 石垣・城郭 | 計画策定／史跡 |
| 谷﨑　淳一 | 熊本商工会議所専務理事 | 地域活性化 | 活用 |
| 富田　紘一 | 熊本市文化財専門相談員 | 考古学 | 活用／絵図・文献 |
| 中井　滋 | 公募 | 公募 | 活用 |
| 永田　求 | 熊本県文化協会常務理事 | 文化振興 | 活用 |
| 西嶋　公一 | 熊本経済同友会　熊本の価値創造委員会副委員長 | 地域活性化 | 計画策定／活用 |
| 西村　邦昭 | 公募 | 公募 | 建築／活用 |
| ◎ 平井　聖 | 東京工業大学名誉教授、昭和女子大学特任教授 | 日本建築史 | |
| 松永　和典 | 熊本市中心商店街等連合協議会副会長 | 地元地域 | 活用 |
| ㊫ 松本寿三郎 | 熊本大学名誉教授 | 歴史学 | 活用／絵図・文献 |
| ㊧ 毛利　秀士 | 一新校区自治協議会会長 | 地元地域 | 計画策定／活用 |
| 山尾　敏孝 | 熊本大学大学院自然科学研究科教授 | 土木遺産学 | 史跡／活用 |
| ㊨ 吉田　純一 | 福井工業大学工学部建築土木工学科教授 | 日本建築史 | 計画策定／建築 |
| ○ 吉丸　良治 | 熊本県文化協会会長 | 文化振興 | |

※ 平成 27 年 7 月現在の役職等で記載

（2）審議内容

a．委員会

特別史跡熊本城保存活用委員会

第 1 回　平成 27 年 5 月 27 日（水）

議　題　・各専門部会の審議事項について

出席者　平井委員長、今村委員、北原委員、田中委員、富田委員、中井委員、永田委員、西嶋委員、西村委員、松永委員、毛利委員、山尾委員、吉田委員、吉丸委員

（オブザーバー）熊本県文化課

第 2 回　平成 28 年 3 月 24 日（木）

議　題　・平成 27 年度活動内容について

・各専門部会の検討事項について

出席者　平井委員長、伊東（龍）委員、伊東（麗）委員、今村委員、北野委員、北原委員、田中委員、富田委員、中井委員、永田委員、西嶋委員、西村委員、松本委員、毛利委員、吉田委員

ｂ．専門部会

計画策定部会

第１回　平成 27 年 8 月 11 日（火）

議　題　「特別史跡熊本城跡保存活用計画」の改訂について

出席者　今村部会長、伊東（麗）委員、田中委員、西嶋委員、毛利委員、吉田委員

（オブザーバー）平井委員長、文化庁記念物課、熊本県文化課

第２回　平成 27 年 11 月 27 日（金）

議　題　「特別史跡熊本城跡保存活用計画」の改訂について

出席者　今村部会長、伊東（麗）委員、田中委員、西嶋委員、松本委員、毛利委員、吉田委員

（オブザーバー）平井委員長、熊本県文化課

第３回　平成 28 年 3 月 7 日（月）

議　題　「特別史跡熊本城跡保存活用計画」の改訂について

出席者　今村部会長、伊東（麗）委員、田中委員、西嶋委員、毛利委員、吉田委員

（オブザーバー）平井委員長、文化庁記念物課・参事官、熊本県文化課

史跡部会・建築部会（合同開催）

第１回　平成 27 年 8 月 10 日（月）

議　題　・総括報告書（整備事業編）について

・大小天守（天守閣）耐震化について

・石垣カルテについて

出席者　田中史跡部会長、吉田建築部会長、伊東（龍）委員、今村委員、北野委員、北原委員、西村委員、山尾委員

（オブザーバー）平井委員長、熊本県文化課

第２回　平成 27 年 11 月 27 日（金）

議　題　・台風 15 号災害について

・天守耐震化について

・石垣カルテについて

・樹木管理基準について

出席者　田中史跡部会長、吉田建築部会長、伊東（龍）委員、今村委員、北野委員、北原委員、西村委員、山尾委員

（オブザーバー）平井委員長、伊藤（麗）委員熊本県文化課

第３回　平成 28 年 3 月 7 日（月）

議　題　・宇土櫓石垣変位調査について

・樹木管理基準について

出席者　田中史跡部会長、吉田建築部会長、今村委員、北野委員、西村委員

（オブザーバー）平井委員長、伊藤（麗）委員、文化庁記念物課・参事官、熊本県文化課

活用部会

第１回　平成 27 年 8 月 5 日（水）

議　題　・天守閣耐震化について

・「特別史跡熊本城跡保存活用計画」について

出席者　毛利部会長、谷﨑委員、富田委員、中井委員、永田委員、西嶋委員、西村委員、山尾委員

第２回　平成 27 年 11 月 25 日（水）

議　題　・天守閣耐震化について

・「特別史跡熊本城跡保存活用計画」について

・台風被害の状況について

出席者　毛利部会長、谷﨑委員、富田委員、中井委員、永田委員、西嶋委員、西村委員、松永委員、山尾委員

絵図・文献部会

第１回　平成 27 年 7 月 13（月）

議　題　・総括報告書（資料編）の概要について

・絵図資料の個別審議

出席者　松本部会長、伊東（龍）委員、富田委員

（オブザーバー）熊本県文化課

第２回　平成 28 年 2 月 29 日（月）

議　題　・総括報告書（資料編）の進捗状況について

・絵図資料の個別審議

出席者　松本部会長、伊東（龍）委員、富田委員

（オブザーバー）熊本県文化課

5．啓発（刊行図書・論文・報道・講演等）

（1）熊本城調査研究センター刊行図書

『熊本城跡発掘調査報告書 2―本丸御殿の調査―』2016 年 3 月

『熊本城跡発掘調査報告書 3―石垣修理工事と工事に伴う調査―』2016 年 3 月

『特別史跡熊本城跡総括報告書　整備事業編』2016 年 3 月

（2）論文

渡辺勝彦

「城郭建築　明治廃城から保存へ」月刊文化財 620　2015 年 5 月

鶴嶋俊彦

「飛田遺跡群検出古代道路の再評価」『飛田遺跡群 2』熊本県教育委員会編　2016 年 3 月

「小西行長築城の城郭群について」『再検証　小西行長』第 2 集　宇土市教育委員会編　2016 年 3 月

美濃口雅朗（共著）

「九州における非在地系石材墓石の使用」『第 7 回　大名墓研究会』大名墓研究会　2015 年 11 月

（3）報道

5 月　6 日（水）　「樹木影響？石垣に膨らみ　熊本市調査へ」（熊本日日新聞）

5 月 12 日（火）　「熊本城石垣にゆがみ　市が実態調査へ　樹木の根が原因か」（毎日新聞）

5 月 26 日（火）　「熊本城の石垣調査始まる」（NHK 熊本放送局）

5 月 28 日（木）　「熊本城跡保存活用委員会　来年度に管理計画改定」（熊本日日新聞）

6 月　2 日（火）　『市民の宝”共存策探れ　熊本城の石垣と緑』（熊本日日新聞）

6月　6日（土）　「発見　九州スピリット　熊本城、加藤清正の築城」（KBC九州朝日放送）
6月13日（土）　「発見　九州スピリット　清正公が城に秘めた謎」（　　同上　　）
6月20日（土）　「発見　九州スピリット　食べられる城」　　（　　同上　　）
6月27日（土）　「発見　九州スピリット　庶民に愛された『せいしょこさん』」（同上）
9月　1日（火）　「北十八間櫓特別公開　熊本城 お城まつり開幕」（熊本日日新聞）
11月29日（日）　「新・日本歩く道紀行　ふるさとの道　火の国熊本」（BS－TBS）
1月　3日（日）　平成２８年新年特番「熊本城ものがたり」（RKK熊本放送）
3月19日（土）　プラタモリ　「熊本城は“やりすぎ城”」（NHK）
3月25日（金）　「熊本城石垣調査（カルテ作成）へ　保存活用委員会で報告」（熊本日日新聞）

（4）講演等

| 講師 | 講座名 | 種別 | 場所 | 実施日 |
|---|---|---|---|---|
| 鶴嶋 俊彦 | 清正の城　行長の城 | 西南の役記念講演 | 市民会館崇城大学ホール大会議室 | 平成27年4月25日(土) |
| 木下 泰葉 | 加藤清正の生涯―手紙にみる清正と熊本城― | 出前講座 | 龍田公民館 B 会議室 | 5月29日(金) |
| 古賀 丈晴<br>田代 純一 | 伝統工法での復元について | 戸畑工業高校熊本城見学会 | 馬具櫓 | 6月19日(金) |
| 鶴嶋 俊彦 | "ここが凄い"熊本城　特別史跡熊本城跡の見所伝授 | 湧々座特別講演会「くまもと講座」 | 湧々座 2 階ものがたり御殿 | 6月20日(土) |
| 美濃口雅朗 | 西南戦争の舞台　熊本城 | 湧々座特別講演会関連展示ギャラリートーク | 湧々座エントランス | 6月20日(土) |
| 金田 一精 | 本丸御殿の発掘調査 | 出前講座 | 東本願寺真宗大谷派熊本教務所 | 6月21日(日) |
| 鶴嶋 俊彦 | 熊本城石垣の特徴 | 出前講座 | 三の丸第二駐車場 | 7月4日(土) |
| 美濃口雅朗 | 熊本城下町の歴史―出土陶磁器からみた城下町のくらし― | 塚原歴史民俗資料館講座 | 塚原歴史民俗資料館 | 7月5日(日) |
| 鶴嶋 俊彦 | 熊本城と四方寄町の歴史 | 出前講座 | 四方寄町馬出公民館 | 7月9日(木) |
| 古賀 丈晴 | 熊本城復元整備とまちづくり | 出前講座 | 花畑町太陽生命熊本第２ビル | 7月24日(金) |
| 美濃口雅朗 | 九州における近世大名墓の成立 | 出前講座 | 市民会館崇城大学ホール会議室 | 8月21日(金) |
| 鶴嶋 俊彦 | 熊本城と治水 | 出前講座 | 中央公民館 | 9月16日(水) |
| 鶴嶋 俊彦 | 近代戦争に勝利した熊本城 | 西南戦争歴史講座 | 植木文化センター | 9月27日(日) |
| 美濃口雅朗 | 陶磁器からみた西南戦争 | 出前講座 | 五福まちづくり交流センター | 10月17日(土) |
| 美濃口雅朗 | 陶磁器が語る相良清兵衛・内蔵助 | 依頼 | 人吉城歴史館 | 10月25日(日) |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 鶴嶋 俊彦 | 池田一丁目の歴史（街道・京町構え・出町・歴史遺産） | 出前講座 | 池田公民館 | 10 月 25 日(日) |
| 鶴嶋 俊彦 | 城跡から考える球磨の中世史 | 文化財保護協会第 5 回文化財研修会 | 相良村公民館 | 10 月 28 日(水) |
| 鶴嶋 俊彦 | 熊本城の築城 | 出前講座 | ＫＫＲホテル | 11 月 20 日(金) |
| 鶴嶋 俊彦 | 熊本城と支城 | 歴史文書資料室歴史講座 | 市役所 6 階会議室 | 11 月 24 日(火) |
| 美濃口雅朗 | 史跡妙解寺・泰勝寺墓所―細川大名家墓所が語る歴史 | 湧々座特別講演会「くまもと講座」 | 湧々座 2 階ものがたり御殿 | 12 月 5 日(土) |
| 金田 一精 | 屋根瓦が語る熊本城の歴史 | 湧々座特別講演会関連展示ギャラリートーク | 湧々座エントランス | 12 月 5 日(土) |
| 美濃口雅朗 | 相良頼景館跡出土の陶磁器 | 多良木町埋蔵文化財等センター講座 | 多良木町埋蔵文化財等センター | 12 月 13 日(日) |
| 鶴嶋 俊彦 | 熊本城のセキュリティ | コンピューターセキュリティー学会特別講演 | ホテル熊本ニュースカイ | 平成 28 年 1 月 21 日(木) |
| 鶴嶋 俊彦 | 熊本城の歴史　現地見学 | 出前講座 | 本丸付近 | 1 月 28 日(木) |
| 古賀 丈晴<br>田代 純一 | 熊本城の重要文化財及び復元建造物について | 文化財ヘリテージマネージャー講座 | 本丸御殿ほか | 2 月 20 日(土) |
| 美濃口雅朗 | 石造文化財からみた寛政津波―悉皆調査の視点と意義― | 熊本県市町村文化財担当者連絡協議会平成 27 年度研修会 | 宇土市教育委員会 | 2 月 25 日(木) |
| 木下 泰葉 | 古文書からみる熊本城 | 文化財保護協会第 10 回文化財研修会 | 城彩苑多目的室 | 3 月 16 日(水) |
| 木下 泰葉 | 熊本城前史 | 出前講座 | 龍田公民館 B 会議室 | 3 月 18 日(金) |
| 鶴嶋 俊彦 | 熊本城と城下の歴史 | 出前講座 | 公民館 | 3 月 23 日(水) |

6．寄贈図書（敬称略）

**石川県金沢城調査研究所**

『金沢城調査研究所年報 8　（平成 26 年度）』石川県金沢城調査研究所　2015

『研究紀要　金沢城研究　第 13 号』同研究所　2015

『金沢城史料叢書 22　金沢城普請作事史料 3　奥村栄実御用番并御城方日記』同研究所　2015

『金沢城史料叢書 23　金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 7　金沢城跡　－ 橋爪門－ 』同研究所　2015

『金沢城史料叢書 24　金沢城公園整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書 8　金沢城跡　－ 玉泉院丸庭園Ⅰ－ 』同研究所　2015

**一般社団法人　国宝修理装潢師連盟**

『平成 26 年度　一般社団法人国宝修理装潢師連盟第 20 回定期研修会報告集』一般社団法人　国宝修理装潢師連盟　2014

**指宿市考古博物館　時遊館 COCCOはしむれ文化係**

『指宿市考古博物館　時遊館 COCCOはしむれ　平成

21・22 年度　博物館年報・紀要　第 9 号』指宿市考古博物館　2011

『指宿市考古博物館　時遊館 COCCOはしむれ　平成 23・24 年度　博物館年報・紀要　第 10 号』同館 2013

『指宿市考古博物館　時遊館 COCCOはしむれ　平成 25・26 年度　博物館年報・紀要　第 11 号』同館 2015

**臼杵市教育委員会　文化・文化財課　文化財研究室**

『臼杵市近世絵図資料群修復報告書』臼杵市教育委員会　2014

**大分市埋蔵文化財保存活用センター**

『史跡大友氏遺跡保存管理計画書』大分市教育委員会　2014

『大分市埋蔵文化財発掘調査報告書　第 134 集　鶴崎御茶屋跡 3　－ 鶴崎小学校校舎及び給食調理場建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』同教育委員会　2015

『大分市埋蔵文化財発掘調査報告書　第 135 集　横尾遺跡 9　－ 大分市横尾土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』同教育委員会　2015

『大分市埋蔵文化財発掘調査報告書　第 136 集　大友府内 20　中世大友府内町跡第 107 次調査　－ 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』同教育委員会　2015

『大分市埋蔵文化財発掘調査報告書　第 137 集　大友府内 21　中世大友府内跡第 108 次調査　集合住宅建設に伴う発掘調査報告書』同教育委員会　2015

『大分市埋蔵文化財発掘調査報告書　第 138 集　大友氏館跡 1　大分県大分市顕徳町 3 丁目所在の大友氏館跡確認調査報告書』大分市教育委員会文化財課　2015

『大分市埋蔵文化財調査概要報告 2014　平成 25 年度版』同課　2015

**嘉島町教育委員会**

『嘉島町文化財報告書　第 1 集　嘉島町東部台地遺跡郡　－ C エリアにおける調査概要報告－』嘉島町教育委員会　2015

**株式会社　イビソク**

『熱田神宮内遺跡　－ 神楽殿及びその周辺の発掘調査報告書－』株式会社イビソク　2009

『イビソク京都市内遺跡調査報告　第 9 輯　伏見城跡　－ 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』株式会社イビソク関西支店　2014

**熊本県教育委員会**

『熊本県文化財調査報告書　第 308 集　桑鶴遺跡群・五丁中原遺跡　－ 砂原四方寄線地域連携推進改築事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－』熊本県教育委員会　2015

『熊本県文化財調査報告書　第 309 集　池辺寺関連遺跡　一般県道砂原四方寄線地域連携推進改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』同教育委員会　2015

『熊本県文化財調査報告書　第 310 集　塔平遺跡 3 ―国土交通省九州横断自動車道延岡線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査―』同教育委員会　2015

『熊本県文化財調査報告書　第 311 集　新南部遺跡群 3　白川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』同教育委員会　2015

『熊本県文化財調査報告書　第 312 集　野入遺跡　県道玉名植木線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』同教育委員会　2015

『熊本県文化財調査報告書　第 313 集　新南部遺跡群 4　－ 瀬田熊本線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－』同教育委員会　2015

『熊本県文化財調査報告書　第 314 集　新屋敷遺跡 4　－ 国土交通省白川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－』同教育委員会　2015

『熊本県文化財調査報告書　第 315 集　飛田遺跡群 1　一般国道 3 号熊本北バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』同教育委員会　2015

『熊本県文化財調査報告書　第 316 集　健軍神社周辺遺跡群』同教育委員会　2015

**熊本県文化財資料室**

『熊本県文化財調査報告書　第 183 集　冨重写真所資料調査報告書　平成 10 年度』熊本県教育委員会　1999

**熊本市教育委員会**

『熊本市の文化財　第 45 集　藤原遺跡　市道宿 ~

迎原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』熊本市教育委員会　2015

**熊本大学文学部附属永青文庫研究センター**

『熊本大学文学部附属　永青文庫研究センター年報第 6 号』熊本大学文学部附属永青文庫研究センター　2015

『熊本大学寄託永青文庫資料　総目録　歴史資料編 1』同センター　2015

『熊本大学寄託永青文庫資料　総目録　歴史資料編 2』同センター　2015

『熊本大学寄託永青文庫資料　総目録　歴史資料編 3』同センター　2015

『熊本大学寄託永青文庫資料　総目録　文学・文芸・故実・芸能編　絵図・地図・指図編　歴史資料編補遺』同センター　2015

**熊本博物館**

『熊本博物館館報　№27　2014 年度報告』熊本博物館　2015

『熊本県球磨郡あさぎり町所蔵品　熊本博物館展示リニューアル記念　黄金文化への憧れ　国指定重要文化財　才園古墳出土品』同博物館　2016

**公益財団法人千葉県教育振興財団　文化財センター**

『房総の文化財 VOL. 54』公益財団法人千葉県教育振興財団　2015

『千葉県教育振興財団　文化財センター年報№40 － 平成 26 年度－』同財団　2015

『研究連絡誌　第 76 号』公益財団法人千葉県教育振興財団文化財センター　2015

**公益財団法人鳥取市文化財団　鳥取市埋蔵文化財センター**

『鳥取城下町遺跡（第 3 次調査）　鳥取赤十字病院新病棟等増改築工事事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書』公益財団法人鳥取市文化財団　2015

**財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室**

『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 258 集　小倉城普請所跡　街路事業城内大手町線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　2001

『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 261 集　米町遺跡 2　（第 2 地点の調査）』同室　2001

『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 283 集　紺屋町遺跡　ビジネスホテル建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』財団法人北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室　2002

『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 293 集　小倉城代米御蔵跡　城内大手町線道路改築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告』同室　2003

『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 298 集　竪町遺跡第 2 地点　都市計画道路大門三六線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 2』同室　2003

『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 313 集　小倉城代米御蔵跡Ⅳ　城内大手町線道路改築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告』同室　2004

『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 314 集　小倉城新馬場跡　都市計画道路大門・木町線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 1』同室　2004

『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 337 集　室町遺跡第 7 地点　市道室町 1 号線自転車駐車場建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告』同室　2005

『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 344 集　京町遺跡第 5 地点　山縣三郎平屋敷の調査』同室　2006

『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 347 集　室町遺跡第 5 地点　商業施設建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書』同室　2006

『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 349 集　小倉城二ノ丸家老屋敷跡第 2 地点　室町一丁目地区市街地開発事業に伴う埋蔵文化財調査』同室　2006

『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 355 集　大手町遺跡第 5 地点　共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』同室　2006

『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 357 集　室町遺跡第 6 地点　北九州先端医療研究所ビル新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』同室　2006

『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 359 集　長浜遺跡　長浜地区密集住宅市街地整備事業に伴う発掘調査報告書 1』同室　2006

『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 362 集　小倉城三ノ丸跡第 3 地点　小笠原織衛屋敷跡の調査』同室　2007

『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 363 集　大門遺跡第 3 地点　長崎街道及び大門の調査』同室

2007
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 370 集　小倉城桜町口門跡・大門遺跡　大門木町線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』同室　2007
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 372 集　大手町遺跡（小倉城外堀跡）　商業施設建設に伴う埋蔵文化財調査報告』同室　2007
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 381 集　小倉城代米御蔵跡・御普請所跡（第 2 次調査）　城内大手町線道路改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告』同室　2008
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 382 集　大手町遺跡第 7 地点　城内大手町線道路改築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告』同室　2008
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 384 集　小倉城御花畠跡 2（第 2 地点 2 区）　大門木町線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告 3』同室　2008
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 388 集　長浜遺跡第 2 地点　砂津長浜線街路事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告 1』同室　2008
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 389 集　大門遺跡　第 4 地点（1 区）　小倉駅大門線道路改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告 1』同室　2008
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 398 集　小倉城御花畠跡 3（第 2 地点 3 区）』同室　2008
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 399 集　小倉城三ノ丸跡第 4 地点　小倉小笠原藩藩士・牧野弥次左衛門屋敷跡の調査』同室　2008
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 400 集　米町遺跡（第 3 地点）　西鉄イン小倉増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』同室　2008
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 402 集　大手町遺跡第 8 地点』同室　2008
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 404 集　室町遺跡第 10 地点』同室　2008
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 405 集　備後守屋鋪南側土塁跡　共同住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』同室　2008
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 409 集　大門遺跡第 4 地点（2 区・3 区）　小倉駅大門線道路改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告 2』同室　2009
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 414 集　長浜遺跡第 2 地点 2　砂津長浜線街路事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告 2』同室　2009
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 420 集　小倉城三ノ丸跡第 6 地点　思永中学校改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 1』同室　2009
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 439 集　小倉城三ノ丸跡第 6 地点 2　思永中学校改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告 2』同室　2010
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 440 集　小倉城三ノ丸跡第 6 地点 3　思永中学校改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告 3』同室　2010
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 448 集　小倉城三ノ丸跡第 5 地点　大門木町線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告 6』同室　2011
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 462 集　小倉城三ノ丸跡第 6 地点 4（3 区の調査）　思永中学校改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告 4』同室　2011
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 473 集　小倉城三ノ丸跡第 6 地点 5（4 区と 5 区の調査）　思永中学校整備 PFI 事業に伴う埋蔵文化財調査報告』同室　2012
『北九州市埋蔵文化財調査報告書第 481 集　長浜遺跡第 8 地点　長浜地区住宅市街地総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告 2』同室　2012

**静岡県埋蔵文化財センター**

『静岡県埋蔵文化財センター研究紀要　第 4 号 2015』静岡県埋蔵文化財センター　2015
『ふじのくに考古通信　2016. 1　Vol. 10』同センター　2016

**鳥取県埋蔵文化財センター**

『鳥取県立鳥取西高等学校改築計画に係る埋蔵文化財発掘調査報告書　鳥取場跡籾蔵跡（第 20 次調査）』公益財団法人鳥取市文化財団　2011
『史跡　鳥取藩主池田家墓所』公益財団法人史跡鳥取藩主池田家墓所保存会　2015
『隠れたる名城　米子城 － その価値と魅力に迫る － 』米子市・米子市教育委員会　2016

**富田紘一**

『新山鹿双書 10　第十回　山鹿市文化歴史講演会講演録　古写真に見る西南戦争－ 山鹿方面の戦跡－ 』

山鹿市教育委員会社会教育課　2015

**中津市教育委員会**

『中近世城館確認調査（２）　市内遺跡試掘確認調査市内遺跡発掘調査概報 8　中津市文化財調査報告第 72 集』中津市教育委員会　2015

**奈良大学文学部文化財学科**

『文化財学報　第 33 集　西山要一先生退職記念論集』奈良大学文学部文化財学科　2015

**東アジア瓦研究会**（立命館大学文学部）

『東アジア瓦研究　第 4 号』東アジア瓦研究会　2015

**彦根市教育委員会事務局　文化財部文化財課**

『彦根市文化財調査報告書第 1 集　国指定史跡　清涼寺「彦根藩主伊井家墓所」調査報告書』彦根市教育委員会文化財部文化財課　2009

『彦根市文化財調査報告書第 3 集　特別史跡彦根城跡　石垣総合調査報告書』同課　2010

『彦根市文化財調査報告書第 4 集　名勝玄宮楽々園範囲確認調査報告書』同課　2011

『彦根市文化財調査報告書第 5 集　特別史跡彦根城跡　石垣保存修理工事報告書 1』同課　2012

『彦根市文化財調査報告書第 6 集　特別史跡彦根城跡　彦根藩蒲校弘道館跡範囲確認調査報告書』同課　2015

『彦根市文化財調査報告書第 7 集　特別史跡彦根城跡　石垣保存修理工事報告書』同課　2015

『彦根市文化財調査報告書第 8 集　彦根城外堀関連遺構　範囲確認調査報告書 1　－油懸口・高宮口間の第 1 次発掘調査－』同課　2015

『彦根市歴史的風致維持向上計画　～「再発見と新創造」世代をつなぎ未来に誇れる彦根城下町へ～』彦根市　2014

**姫路市立城郭研究室**

『城郭研究室年報　VOL. 25』姫路市立城郭研究室　2016

**弘前市教育委員会　文化財課埋蔵文化財係**

『弘前市内遺跡発掘調査報告書 19』青森県弘前市教育委員会　2015

『史跡大森勝山遺跡保存管理計画　策定報告書』同教育委員会　2015

**福井市文化財保護センター**

『高柳遺跡　発掘調査報告書　本文編』福井市文化財保護センター　2011

『高柳遺跡　発掘調査報告書　図版編』同センター　2011

『石盛遺跡　森田北東部土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書 1』同センター　2014

『石盛遺跡Ⅱ　森田北東部土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書 2』同センター　2015

『平成 25 年度　年報』同センター　2015

『高柳遺跡Ⅱ　（新）中藤小学校建設事業に伴う発掘調査報告書』福井市教育委員会　2012

『福井城跡ＸＩＸ　ジェイアール福井駅西 NK ビル開発に伴う発掘調査報告書』福井市教育委員会・西日本旅客鉄道株式会社・ＪＲ西日本不動産開発株式会社　2016

**水俣市教育委員会生涯学習課文化振興係**

『水俣市文化財調査報告書　第 5 集　水俣城跡　－確認調査報告書－』水俣市教育委員会　2015

**FUT 福井城郭研究所**

『FUT 福井城郭研究所年報　2013　NO1（創刊号）』FUT 福井城郭研究所　2014

『FUT 福井城郭研究所年報　2014　NO2（創刊号）』同研究所　2015

『FUT 福井城郭研究所年報　2015　NO3』同研究所　2016

吉田純一『FUT 福井城研究所選書　福井の城あれこれ話』同研究所　2015

**吉田純一**

『松平吉品公 300 回忌記念出版　瑞源寺と松平吉品』臨済宗妙心寺派　高照山　瑞源寺　2011

国京克己・建築設計工房『福井県指定有形文化財　瑞源寺本堂・書院修理工事報告書』臨済宗妙心寺派高照山　瑞源寺　2011

**吉野敏武**

宍倉佐敏・渡辺滋『和紙用語集』紙の温度株式会社　2011

和紙文化研究編集委員会『和紙文化研究　第 21 号』和紙文化研究会　2013

吉野敏武『古典籍の装幀と造本』株式会社印刷学会出版部　2016

## Ⅲ．研究ノート

# 熊本城跡出土の文字瓦１

金田　一精

１．城内出土の文字瓦

城内から出土した瓦には、文字がみられるものがある。著名なものとしては瓦当面の中央に区画を設けて年号を入れた滴水瓦がある。他に、鬼瓦等の裏面に年号・由来・製作地・製作者を表現したもの、丸瓦・平瓦等に年号・作者名を刻印したものがよくみられるもので、まれに軒平瓦の文様として文字を入れたものがある。文字の中でも、年号を入れたものはその瓦の製作した時期の上限を示すもので、長期にわたって製作された熊本城所用瓦の技法の変化を掴み、編年を行う上で重要な資料となる。

今回、飯田丸・本丸御殿出土の瓦を整理・報告する中で、軒平瓦の文様として文字を入れたものがあった。また、近年、熊本県教育委員会から刊行された『熊本城跡遺跡群』にも同様の瓦があり、いずれも熊本城としては古い年号を記していた。ここでは、この文字を入れた軒平瓦の紹介と評価を行なう。

２．文字入り軒平瓦（第１・２図）

１は、飯田丸の調査から出土した軒平瓦で、上に開く三葉文を中心飾りとして通常は左右に唐草が展開する部分に文字を配している。鏡文字になっており、笵に正字として彫ったものである。瓦当面に向かって、右側に内側から外側へ「文禄四年」向かって左側に内側から外側へ「拾月一日」と彫られている。合わせて「文禄四年十月一日」の意味であろう。同笵の２が本丸御殿の調査で出土している。２は中心飾りを欠き、向かって右側の一部しか残存していない。１は完形資料であり、製作技法を記す。全長は27㎝、瓦当面の幅は上弦で23.7㎝、文様区の幅は19.3㎝で高さは2.2㎝である。瓦当面の左端には笵端と思われる段差があり、文様区の上下をなでた程度で、瓦当面は施文後ほぼ未調整である。瓦当面の上端は、瓦当面に沿って斜めに面取りが施されている。顎部は顎貼り付け技法で接合されており、顎部は強くなでて仕上げられている。平瓦凹面は丁寧になでて仕上げられているが、胎土にもろい灰状のものが含まれるためか細かな孔が多い。なでが甘い部分に緩弧線状の痕跡がみられる。凸面は粗いなでで仕上げており、表面に細かな砂が目立つ。側縁に凹型台の痕跡と、端部に弓形圧痕がみられる。

３・４は熊本県教育委員会が行った新馬借Ａ－１区から出土したものである。上に開く三葉文を中心飾りとし、三葉文の下から左右に伸びて上に１回反転する唐草を配し、唐草の一部に被るように文字を彫り込んでいる。２点は同笵であり、いずれも瓦当面の右側は欠落して不明だが、左側に外側から内側へ「天正十八年」と彫られている。こちらも鏡文字で、笵に正字として彫っている。今回実見していないために細かな技法は不明である。出土地点は、総構の西端の高麗門に近接している。

５・６・７・８も文字が彫られていると思われるが、現状では判読できない。５・６・７の３点は同笵の可能性が高い。この他にも飯田丸の調査で判読できない小片が出土している。

判読できないものは鏡文字か正字か判然としないが、中心飾りは上三葉文で唐草部分が文字に置き換わっている点はすべて共通する。天正十八年（1590年）と文禄四年（1595年）は比較的明瞭に判読できる。これらの瓦から、工人または発注者が年号を認識していたことと、仕上がりを正字にする意識は薄かったことが指摘できる。

３．文字入り瓦の評価

熊本城の出土状況としては、軒丸瓦は九曜文に次いで三巴文が多い。いずれも量的には加藤家の家紋である

桔梗文軒丸瓦を圧倒する。これは家紋瓦を使用する前の文様として一般的な三巴文を築城時に大量に使用したことの反映である。三巴文軒丸瓦とセットとなるのが桐・宝珠・三葉文等の中心飾りを持つ軒平瓦である。中心飾りのバリエーションが多い。三巴文軒丸瓦＋桐・宝珠・三葉文等の中心飾りを持つ軒平瓦が熊本城築城段階の一群で、加藤家家紋瓦、細川家家紋瓦と変遷すると考えている。築城段階の一群には、肥前名護屋城跡出土瓦と同笵の可能性が高い三巴文軒丸瓦・桐文軒丸瓦・軒平瓦が含まれ、この段階の一部が名護屋城の存続時期と重なることがわかる。史料の面からも天正十九年十月十四日の加藤清正書状に、名護屋城の御唐物蔵の屋根用の瓦を焼く指示があり、時期的な重なりの補足となる。

第１・２図に示した文字入り軒平瓦の中心飾りはいずれも上三葉文で、築城段階の一群に含まれる。「天正十八年」瓦と「文禄四年」瓦の中心飾りに大きな形式差は無く、少なくとも５・６年間は文様に大きな変化は無いことがわかる。これに近似した上三葉文は名護屋城軒平瓦Ⅰ－６類にみられる。「文禄四年」は、名護屋城の存続期間でもあり文様の形式と年代観に妥当性があり、築城段階とした一群の時間軸上の定点とすることができる。「天正十八年」については、加藤清正が肥後に入国した翌々年であり、この段階の熊本城普請については不明瞭な点が多い。天正十九年から二十年にかけては、清正からの築城指示が多く出されており、熊本城普請が本格化したと考えられている。名護屋城普請は天正十八年に始まり、天正十九年に豊臣秀吉の居館や山里丸・大手門などが造作されたとされる。先の天正十九年十月十四日の加藤清正書状で、少なくとも天正十九年には加藤清正の所領内で瓦の製作が可能であったことがわかる。このような状況下での「天正十八年」軒平瓦は、熊本城用として製作された可能性と、逆に瓦を使用していた寺院等の所用瓦を持ち込んだ可能性も考えられる。前者の可能性が高いと考えているが、この時期の城郭以外の瓦の使用・製作状況は現状では不明である。いずれにせよ織豊期の肥後の瓦を知る上で、時間的な定点となる資料として非常に重要である。

また、今回紹介した文字入り軒平瓦を含む築城段階の瓦は、城内の広い範囲から出土する。将来、時期的な細分化の必要があるものの、名護屋城と並行する時期の瓦は、熊本城の古城用に製作されたものであろう。これらが飯田丸や西出丸・本丸御殿といった新城から出土する点は、古城から新城へ瓦を移したことを意味する。今後その要因に注意する必要がある。

年号が入った軒平瓦は、佐敷城・水俣城出土例にも「慶長十二年」例がある。これは正字で中心飾りも無い。年号を文様と意識して彫ったものであろう。慶長十二年（1607 年）はすでに瓦当文様に家紋を使用していた時期である。今回集成したものと時間的・空間的間を埋める資料はまだ知られておらず、連続性があるのかは判然としない。

参考文献


１．山崎信二『瓦が語る日本史　中世寺院から近世城郭まで』2012 年

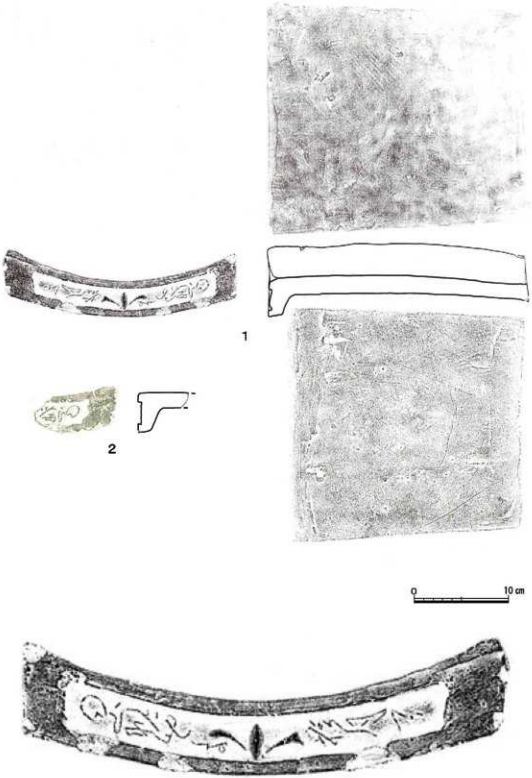
２．後藤宏樹「名護屋城跡出土の軒平瓦」『研究紀要第２集』佐賀県立名護屋城博物館　1996 年

３．熊本県教育委員会「熊本城跡遺跡群」『熊本県文化財調査報告第 303 集』2014 年

４．熊本市教育委員会『特別史跡熊本城跡　石垣保存修理工事・発掘調査報告書』1999 年

５．熊本城調査研究センター「熊本城跡発掘調査報告書１－ 飯田丸の調査－ 」『熊本城調査研究センター報告書第１集』2014 年

６．熊本城調査研究センター「熊本城跡発掘調査報告書２－ 本丸御殿の調査－ 」『熊本城調査研究センター報告書第２集』2016 年




年　四　禄　文　　〔中心飾り〕　拾　月　一日

1の左右反転（縮尺任意）

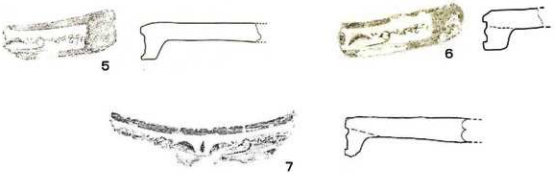
1飯田丸出土　2本丸御殿出土

第1図　文字瓦実測図1

3・4　高麗門（新馬借 A-1 調査区）出土

年　八　十　正天

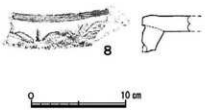
3の左右反転（縮尺任意）




5西出丸出土　6本丸御殿出土　7高麗門（新馬借 A-1 調査区）出土

6の左右反転（縮尺任意）

7の左右反転（縮尺任意）




8高麗門（新馬借 A-1 調査区）出土

8の左右反転（縮尺任意）

第２図　文字瓦実測図２

# 寛永期の熊本城本丸御殿と「地震屋」

木下　泰葉

## 序

熊本城の「二様の石垣」といえば、加藤時代の石垣に細川時代の石垣が築き足されたものと一般に理解されている。しかし、拡張された石垣上には加藤時代に建てられたとされる本丸御殿大広間が位置しており、石垣の拡張年代が理解しづらいものとなっている。仮に細川時代に石垣の拡張が行われたとすれば、武家諸法度で城郭の修理・改築が統制された時期であることから、石垣の拡張に伴う絵図の作成や幕府年寄衆との折衝が行われたと考えられるが、それを示す史料は現時点で確認できず[1]、本丸内の屋敷の解体に関するものが数点あるのみである。「二様の石垣」の成立年代を検討する上で、改めて細川期にどの程度の改修が行われたのかを把握する必要があろう。本稿では、熊本城本丸での屋敷の解体と、解体後に建てられた「地震屋」と呼ばれる建物に関する検討を行なう。

## 近世初頭の地震活動と「地震屋」

16 世紀末から 17 世紀初頭は日本列島各地で大きな地震災害に見舞われた時期だった。文禄 4 年 ( 1596 ) には伊予、豊後、伏見で立て続けに大地震が発生し、伏見城が倒壊した。慶長 9 年 ( 1604 ) には南海トラフに原因するとみられる大地震が発生し、列島を津波が襲った。さらに、慶長 16 年 ( 1611 ) には東北で慶長三陸地震が発生した。

熊本では、元和 5 年 ( 1619 ) 3 月 17 日、県南部でマグニチュード 6 と推定される地震が発生し、八代の麦島城が倒壊した。なお、麦島城二の丸東の堀からは石垣上にあった櫓の一部が堀に落ちたままの状態で出土しており、地震による倒壊の可能性がある[2]。甚大な被害を受けた麦島城は、北の松江の地に元和 8 年 ( 1622 ) に再建された。また、この地震では豊後岡城でも複数箇所で石垣の崩落や孕み、地割れや石垣の沈下が生じたほか、御殿がゆがみ障壁画が悉く破れた[3]。その 6 年後の寛永 2 年 ( 1625 ) には、熊本地方でマグニチュード 5～6 程度の地震が発生した。熊本城では天守が損傷し、石垣が崩落したほか、煙硝蔵が爆発するなどの被害が出ており、この時城内での死者は 50 名にのぼったという。その後、寛永 10 年 ( 1633 ) には小田原でマグニチュード 7. 1 とされる地震により、小田原城が大きな被害を受けている。

さて、江戸時代、京都御所や江戸城、各大名居城や大名屋敷には、「地震間」や「地震御殿」といった地震時に緊急的に避難する建築物があったことが先行研究により明らかにされている。内裏では天和 3 年 ( 1683 ) に「地震御殿」が造られたとされる[4]。「延宝度内裏指図」には庭園に面して 2 間× 2 間の「地震御殿」が描かれている。また、現存する彦根城楽々園の「地震の間」は重量の軽い数寄屋造の建物であり、柱脚部に足固めがされている等、耐震を意識した構造であるとの指摘がなされた[5]。

細川家の地震の間は「地震屋」と呼ばれており、比較的早い段階から確認できる。小倉藩時代には、小倉城の「御上」と天守との間に「御地震屋」があり、入口には鍵がかけられていた[6]。また、現存している絵図「御花畑図」で国許の花畑屋敷のほか、「寛永之頃ト相見候龍口御屋敷之図」によれば、江戸の龍口屋敷にも「地震屋」と呼ばれる建物の存在を確認できる[7]。いずれも奥向の居間に近く、庭に面した場所に位置している。熊本では元禄 8 年 ( 1695 ) 年以降に作成された花畑御殿の絵図には「御地震屋」が庭に面して建てられているが、寛政年間の絵図では解体されている[8]。このような「地震屋」は、地震の際に藩主が身の安全を確保するための建物と考えられる。

## 熊本城本丸御殿の「地震屋」

寛永 9 年 ( 1632 )、加藤家は改易となり、熊本への細川家の転封が決まり、忠利は寛永 9 年 12 月に熊本城に

入城した。惣構の大きさと城の広さに感嘆した忠利だったが、同時に加藤家以来の城郭の修理・改修が急務であると認識し、寛永 11 年 ( 1634 ) 3 月には石垣 27 箇所、土手 5 箇所、堀 4 箇所、水通し 4 箇所、堺 4 箇所、櫓 28 箇所、門 12 箇所にのぼる普請・作事の許可を求める絵図を提出している。絵図に付けられた願書部分には「肥後守時ゟ御座候堺・矢蔵も数々修理に向候間、此度得　御意候分一度ニハ不罷成候条、連々以申付度奉存候」とあり、加藤家以来の堺や櫓の多くが修理の時期を迎えていた。また、破損した石垣も多くあった。このような状況は、寛永 2 年に熊本で発生した地震による破損の修理が終わらないまま加藤家が改易となったという理由だけでなく、細川家が入国してからも地震災害が継続して発生していたことによる。

次に掲げるのは、寛永 10 年 5 月 11 日付の狩野是斎宛の細川忠利書状案である。

【史料 1】[9]

卯月廿五日之書状具ニ見申候、柳生殿・我等儀ハ国廻知行割緩々と可仕候、御年寄衆ゟも時分可被仰由、折々忝　御意之由過分候由可申候

一、黒田殿未御礼無之由鑾而可被仰出由、年寄衆被申通早々可相済事を何たる事ニて候哉、扨ハ所かへ高もへり候様ニ可申候へ共、此上ハ左様にも有間敷と存候、更共いか成うつけたる御請なと被仕候哉

一、熊本地震之事少つゝ陶（ずい）候へ共此程ハ遠のき候、あふなく候て庭のなき本丸ニハ被居不申候、本丸ニハ二条（でう）敷と有之庭ハ無之四方高石垣、其上矢倉・天主中ノヽあふなき事にて候事

一、罷下得　御意、地震屋を仕候、庭を取不申候へハ本丸ニハ被居不申候、此由を柳生殿へ物語可申候事

以上

五月十一日　　（忠利）

狩野是斎

史料の二箇条目によれば、熊本で地震が続いているが、5 月 11 日時点では収束しつつある状況が窺える。本丸には加藤時代より藩主の謁見の場であり住居でもあった本丸御殿があったが、御殿には避難できるような庭がなく、四方を高石垣や天守・櫓に囲まれており危険と忠利は認識していた。そのため、上京し御意を得た上で「地震屋」を建て、庭を造ることを計画している。この一週間後には地震によるとみられる石垣の破損が発生した。

【史料 2】[10]

一筆申候、熊本二ノ丸東之石垣、小口廿間計只今ぬけ候へとも、人も損不申候、其上二間近高石垣候へとも、水遣能申付候間、崩申間敷候、事々敷聞へ可申候間、為其申候、中ノヽ本丸あふなく候付而、居不申候、其上只今之石垣崩候上二者人とも置不申候間、気遣無之候、縦石垣少々地震二崩候共、人々けか八無之様二申付候間、可心安由、六へも可申候、謹言

五月十八日

松野織部殿

町三右衛門殿

同年 5 月 18 日付で江戸の松野・町両名に宛てられた書状には、「二ノ丸」の東にある石垣が約 20 間破損したことが記される。翌 11 年に幕府に出された絵図の控である「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」( 熊本県立図書館蔵 ) には、東十八間櫓南の石垣に朱線が引かれ、「此朱引破損石垣つき申度所、地口十六間高四間」とあり、この箇所に該当すると考えられる。【史料 2】によれば、当該箇所は付近に高石垣があり、忠利は排水をよくすることで被害の拡大を防いだほか、万が一石垣が崩れても怪我人が発生しないよう措置を講じている。また、

こうした危険から忠利自身は本丸から居所を移している。その後、熊本城本丸での「地震屋」の建設が具体的に動きだすのは翌 11 年の正月である。

【史料3】[11]

一、土井大炊樣・酒井讃岐樣へ参上仕申上候御口上二、肥後熊本城中家迄二而少も明地無御座候、左樣二御座候へハ、去年も切々地しんゆり申候、左樣之時可罷出明地無御座候二付、城中之家少々くづし候へと申遣候、か樣之儀は各樣へ不及申上儀にて御座候へ共、城中二普請之者余多出入仕候へハ、若わき ノ ヽより何樣之普請など仕候哉と御座候へハ、如何二奉存各樣迄申上候、左樣二被成御心得候而可被下候、右之通小杉長兵衛・深栖九郎右衛門を以申上候、

一、右之御返事二、御口上之通具二被聞召届候、熊本御城中つまり候而明所無御座候二付、地しんの時可被成御出所も無御座候間、御家少々くづし可申由、被　仰遣候旨御尤之儀二御座候、前廉も大分之御普請なと被成候御家ハ、被立　御耳候而被成候へとも、是ハそれニハ替り、前廉より御座候御家を御くつし被成候儀二而御座候間、不苦候、被入御念御使之通、委細被為得其意候由被仰候、此旨可被仰上候、以上

正月廿一日　　松野　織部

加々山主馬

生田又助殿

忠利は参勤のため、寛永 10 年 9 月 12 日に熊本を出立した。【史料 3】によれば、寛永 11 年正月 21 日に、熊本城中には地震の際に避難できる空地がないことから、屋敷の一部解体を幕府年寄の土井利勝・酒井忠勝に申し入れた。「か樣之儀は各樣へ不及申上儀にて御座候」とあるように、本来居屋敷については届出の必要はないが、城中に普請の者が多く出入りすることを配慮した行動であった。これに対し、土井・酒井両人の回答は、「普請」ではなく以前よりある屋敷の解体であることから「不苦候」というものだった。

その後、寛永 11 年正月 26 日付で忠利より奉行衆に宛てられた文書には、「本丸家普請可仕候由御年寄衆へ得御意候へハ、家普請八可仕由候、矢蔵普請八必々仕間敷候」とあり、石垣や櫓などの城郭を構成する部分に手を加えておらず、屋敷の改修の範囲に留まっている[12]。

【史料4】[13]

一筆申入候、竹中儀、御尤千万候、仍舟手之者御用二候ハヽ、霧崎之者可被召寄候、次、熊本本丸家多候間矢倉二ハ無構、中之家をこわし、不罷下以前二地震屋を壱ツ立候へと申遣候、家之儀二て候へとも、御年寄衆へも御物語仕候、留主之普請二候間、何事かと思召候ハんと申入候、恐惶謹言

二月廿三日

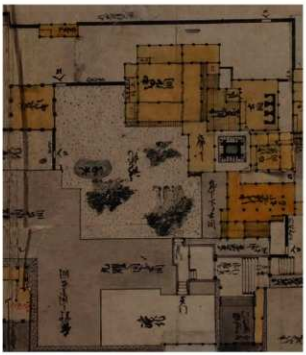
大久保助左衛門樣

川口茂右衛門樣

寛永 11 年 2 月 23 日付で忠利より府内目付の大久保・川口両人に出された書状では、本丸の「中之家」を解体し、忠利帰国以前に「地震屋」を一つ建てることを幕府年寄衆に申し入れたことを報じている。その後、実際に本丸にあった屋敷の一部解体が実施された。寛永 10 年の幕府巡検使派遣と前後して、岡藩中川氏が九州諸大名の動勢を独自に調査した際に作成された「隣国樣子聞合帳」によれば、熊本城内の「げんじノ間」、「御座りノま」を解体し、新たに「七間十五間ほどノ家二ツ出来申由申候」とある[14]。「御座りノ間」は名称から、藩主の居室を指すと考えられる。また、本丸御殿の部屋の名称は障壁画の画題から付けられていることが多いことを踏まえると、「げんじノ間」も障壁画の画題として多く描かれる「源氏物語」にちなんだものと考えられる。この新たに建てられた建物が「地震屋」を指すという確証はないが、実際に御殿の一部の解体が実施された。

結

16 世紀末から 17 世紀初頭にかけて頻発した地震災害による各地の城郭の被災と、肥後入国後間もない地震の経験から、細川忠利は本丸御殿の改修を実施した。それは密集した建築物を整理し、庭を持つ「地震屋」を建築することであった。本丸御殿の平面を唯一描いた「御城内御絵図」には、大広間と小広間の中間や、大広間と中奥にあたる九曜之間・吉野之間の間、奥向の御居間周辺に「路地」と記される庭が描かれる。しかしながら、江戸中期の様子を示す「御城内御絵図」では、前述したように建物のなかに「地震屋」という名称は確認できない。また、作事所が本丸御殿の各部屋の畳数を調査し、矢野雪叟が本丸御殿の障壁画の画題と作者を比定し作成された「御天守密書」にも、「地震屋」の記載はなく、18 世紀中頃には「地震屋」の名称が使われなくなったか、或いは解体された可能性がある[15]。細川家の他の屋敷においては、御居間に隣接して「地震屋」があることから奥向に位置したと推定されるが、今後さらに調査したい。



**本丸御殿の御居間周辺（熊本市蔵「御城内御絵図」）**

註

1）細川氏が入国した直後の寛永 11 年に出された熊本城の普請に関する絵図の控（熊本県立図書館蔵「肥後国熊本城普請仕度所絵図」）では、普請箇所として石垣 27 箇所が挙げられているが、「二様の石垣」の普請は描かれていない。

2）八代市教育委員会『八代市文化財調査報告書　第 30 集　麦島城跡』2006 年

3）竹田市教育委員会『岡城跡石垣等文献調査報告書』2011 年

4）平井聖『中井家文書の研究　第 3 巻　内匠寮本図面篇 3』中央公論美術出版　1978 年

5）斎田時太郎「彦根城楽々園地震の間について」『地震』第 1 輯　1941 年、中村直勝監修『彦根市史　中冊』彦根市役所　1962 年　431～435 頁、川崎一郎・小松原琢・須田達・岡田萬正「彦根城楽々園『地震の間』の地震学的環境」『歴史都市防災論文集』6 号　2012 年

6）「部分御旧記　城郭部　全」公益財団法人永青文庫蔵熊本大学附属図書館寄託永青文庫細川家資料 10. 8. 1. 71

7）北野隆『城郭・侍屋敷古図集成　熊本城』至文堂　1993 年

8）註 7 に同じ。図版番号 35「御花畑図」、図版番号 36「御花畑御絵図」

9）「部分御旧記　御書附并御書部　二十」『熊本縣史料　近世篇第 2』熊本県　1965 年

10）註 6 に同じ

11）『綿考輯録　第四巻　忠利（上）』汲古書院　1989 年

12）「部分御旧記　御書附并御書部　廿三」『熊本縣史料　近世篇第 2』

13）東京大学史料編纂所『大日本近世史料　細川家史料十八』東京大学出版会　2002 年

14）神戸大学文学部日本史研究室編『中川家文書』臨川書店　1987 年

15）熊本県立図書館所蔵の『藻塩草』には「御本丸御座敷」と題される年代不明の史料の写がある。本丸御殿の部屋名、畳数、畳縁の種類が記されており、「九曜間」、「御料理間」（囲炉裏之間カ）に続けて、16 畳半の広さを持つ「御地震間廊下」の記述がある。

熊本城調査研究センター年報 2
平成 27 年度

2016 年 7 月

発行　熊本市熊本城調査研究センター
〒860-0804
熊本市中央区辛島町 8-23　桜ビル辛島町 4F
TEL （096）355-2327